

<H24年度第2回自転車セミナー>報告書

日 時：平成24年7月26日（木）18：00～19：30

場 所：日本自転車会館3号館11階（財）日本自転車普及協会会議室
（東京都港区赤坂1-9-3）

講 師：朝生 つぐみ 氏（タレント／伝えること全般）

テーマ：「私の自転車ライフ」(配布資料より)

自転車がくれる「日々がぐっとたのしくなるかんじ」を、自転車操業自由人朝生つぐみさんがご案内。レースでてみた、本場に行ってみた、輪行旅してみた、イベントしてみた、選手生活のぞいてみた、チーム作ってみた、都内が乗りにくくて二拠点生活してみた、等々どんくさいながらいろいろ試してみても思ったこと。乗るだけじゃノリ切れない自転車とのあんなこんな遊びについて、文化系自転車生活をお話します。

<<要旨>>

当日は“補食”として岡崎名物八丁味噌カステラが朝生さんから配られた。「自転車のみなさんとお付き合いをされていて楽しいのは、甘いものが一緒に楽しめるということ。すごい楽しいです。」

<こんにちは朝生つぐみです～自転車に出会う前>

阪神淡路大震災被災後、東京に。大変な体験をしたせいか普通に就職する気になれず、面白い事をしたい、人生1回でいいから美人と呼ばれたいという動機だけでタレントに。映画、テレビ番組、CM数本に出演したものの、仕事がないままうまく自分を表現することができず、タレント時代が終わった。

<こんにちはじてんしゃ>

自転車との出会いは2002年。フリーランスのタレント活動に限界が見え、活動の場を雑誌に移すべく、マガジンハウスへ。文化芸能系のため、スポーツの経験がなかったのだが、「君にぴったりの部署がある」と通されたのがターザン編集部。「運動をしたことがない」と言うと、素人でも出られるレースがある」と、白戸太郎氏から誘われたのが“セルフディスクバリアードベンチャーレース”（長野県王滝村で開催。トレイルラン、MTB、アスリートクライム等、人力のスポーツを組み合わせ、長距離をチームで移動する過酷なレース）。2003年、白戸太郎氏、藤野智一氏と共に、一般エントリーで出場。

自転車で走るだけでも怖いのに、ガレ場を走るのが怖くてしょうがない。時間を稼ごうとした白戸氏に「これを握っていればいいから」と牽引棒を渡され握ったものの、2秒後には横になったまま引き摺られる状態に。人間が極限状態に置かれると、敵でも愛せてしまうという心理状態、“ストックホルム症候群”に非常に近い状態になり、「自転車好きかも」ということになってしまった。

他の二人はこの程度で音を上げることはもちろんなかったが、自転車選手は普段あまり

脚にショックを与えることがないせいか、藤野氏の膝がリバートレックでダメになってしまった。プロ選手の脆さ、強さをいろいろ見ることができ、「スポーツってなかなか奥の深いものだ」という体験をしたのが、このレースだった。

<自転車を知りたい>

自転車に恋をし、自転車を知りたいと思うように。本場がヨーロッパである、ということで、最初は「これ取材に行けたら旅行じゃないの？」程度だった。プロ選手といえば、テレビの中で見る、タレント以上に手の届かない存在というイメージだった。ライター経験もほとんどないのに、ついて行きたい、そばで見たいなどということが受け容れられるだろうか。とりあえず藤野氏を頼って、ブリヂストンアンカーに打診してみる。

誠意だけは伝われば、と2月の寒空の下、よせばいいのに荒川を、マウンテンバイクで5時間かけて上尾のブリヂストンサイクルまで行き、自分の顔が自分じゃないくらい腫れ上がってしまった。それを見た浅田顕監督「何しに来たっていうか大丈夫？」と目が点に。「遠征を見たいので何とかついていけませんかね」と話をすると、帯同は無理だが取材はさせてもらえることに。沖縄合宿を経てヨーロッパへ。

そこで見たものは、自転車選手の生活が意外にも質素なこと。冷蔵庫の食材を無駄なく使いきるようなきちんとした生活をしていたり、いつメンバーから外されるかわからない競争の中、お互いの皮膚をつまみ合って「ちょっと脂肪ついたんじゃないの」とピリピリしていたり、そんないろいろな気持ちがヨーロッパのちょっと湿った空気と相俟って、「自転車というのは哀切のある乗り物だな」と感じた。

この年ブリヂストンアンカーは、浅田顕監督が「ツール・ド・フランス出場への一つの礎として、結果の年にしたい」と記者発表で言ったとおり、さまざまなレースで快進撃を続け、世界に出ていけるかも、という勢いがあり、自分もそれを見て感動した。

遠征中ずっと選手についていたわけではなく、途中、本場の人たちがどのように自転車と触れているのかを見に行った。フランスでは地域ごとに、指導者のいるクラブチーム、クラブハウスがあり、子供用の自転車を置いて乗り方を教えている。子供たちはクラブハウスを運営しているスポンサー名入りジャージを着て、小さいうちから誰にお世話になっているかということ、しっかり教えられる。3~4歳くらいの三輪車に乗っているような子から中高生の子に至るまで、参加賞も含めてだが、運動会で一度はトロフィーをもらえるという体験をする。国民総じて自転車が好き、というわけではなかったが、小規模でも時間をかけてしっかり作られてきたクラブハウスで、自分のプライドを育てながら、自転車と仲良くやっていく、そんな現場を見た。

ヨーロッパ遠征は、シャルル・ド・ゴールからスロベニアなどを周って、セルビア・モンテネグロまで下り、セルビア・モンテネグロの港からイタリアを北上して、シャルル・ド・ゴールに戻る28泊8,000kmの旅。クレジットカードを持っていないために立ち往生したり、英語でもフランス語でもない言語に苦労したり、セルビア・モンテネグロでは空爆

に遭うなど、命の危険を感じる怖い思いもした。

空爆の翌日、現地の人から「この国は基本的に平和で、それを示したくて自転車レースをやった。空爆の発端は子供の喧嘩を止めようとした親が撃った空砲の音を聞きつけた米軍がヘリを飛ばしたからだ。日本に帰ったら事情を伝えてくれ」と頼まれ(ジャーナリストだと思われていた)、さすがにそれをそのまま伝える勇気も力もなかったが、もし自分が伝えていたら、何かが変わっていたのかもしれない。自転車は平和の架け橋でもあるんだなとも思ったセルビア・モンテネグロだった。

その後イタリアでは、シニアのロングライド(最長 180km)に参加し、健脚のおじいさんたちに混ざって走り、ブービー賞でシャンパン 1 本もらったり、輸送専用の電車に出会って「自転車の国なんだな」と感動したり、ヨーロッパに自転車がどんなふうに溶け込んでいるのかを見た。日常スーパーに買い物に行く時に乗るような使い方はせず、スポーツのために乗っている。用途が分かれている。

手の届くところに自転車レースがあり、トップの選手でもその期間が終わったらタクシーの運転手になる方がすごく多い。命を懸けた大変なスポーツも、永遠に身近なところにある。ここがすごくいいなと思った。

<ANCHOR のおやつ>

今でこそスポンサーがサプライしているケミカルなものを多く見るが、記憶に残っている当時のアンカーのおやつは

○スーパーで売っている 1 袋 10 個入りぐらいのバターロールの、白いところをくりぬいて、ジャム(味を変えるとびっくりして落車するかもしれないので、いつもイチゴ味)を思いっきり詰める(パン 1 袋に対しパイント瓶の半分)。くりぬいた白いところを潰して蓋にして、アルミホイルで包む。

○薄いサンドイッチ用の食パンに、スーパーの一番安いスライスチーズと一番安いハムを挟んだだけ。

体に気遣うのか遣わないのかよくわからないな—と思ったら、藤野智一選手いわく「いいんだよこんなの、エサ、エサ」。

<いろいろしてみた>

帰国後、自転車に関わりたいたがなかなかできず、富士ヒルクライムの MC ついでに T シャツのデザインをしたり、イベント会社のトレーラーのペイント等のデザインワークをしたり。銀座で流しのバイオリン弾きのアルバイト中に、色々な企業の重役方と繋がりができたり、自転車レースなどで関わった土地の食材を使って、お客さんのリクエストを受けてトークしながら料理するというイベントをさせてもらったり。他にも女子 12~3 名で立山にサイクリングに行ったり、一人で輸送旅をしたり、イベントに参加したり、サイクルショーでトークしたり。自転車の一体何を PR すればいいのかを模索していたところ、サイクルショーで長野県飯田市の方と知り合うことに。

<売木村に呼ばれる>

長野県の売木村を自転車の村にしたいので、自転車の話をしてほしいと言われ、行こうかなとは思ったものの、自分はアスリートでもなく実は自転車のことはよく知らない、と伝えると、自転車なんて見たことがないような70~80歳のお年寄りしかいないから大丈夫、とのこと。それならばと、ほのぼのとした話題を持って未知の売木村へ行けば、用意された講演のテーマが“健康朗らかイキイキ”。これは楽勝、自分にもできる自転車講演があったんだ！会場で待っていると、かちゃんかちゃん、と馬の歩くような、聞き慣れた音がする。それが増えてくる。なんか知ってる…この音知ってる……がらっと戸が開いて入ってきたのは、全身自転車ジャージの完璧な自転車人14~5名。朝生つぐみとはどんなやつだと見に来てくださった。

自転車ってこんなですよーフランス行ったらパンがおいしくてねー…みたいなスライドを、大急ぎで入れ替えて、とは言え他に何もないので、フランスの今とか、まちづくりとか、今をときめく新城君と畑中君が、並んでシードルの瓶詰をしている動画を見せて誤魔化し、なんとかその場を乗り切った。その乗り切り方というか、そんな私が面白かったのか、「売木村もいいけど、隣の飯田はもっと面白いよ」ということで、飯田に行くことに。

<飯田に出会う>

長野県が一番下、絞ると水が垂れるあたりに飯田市があり、実はとても特殊な場所だった。昔お城があった小高い丘に、真っ赤な屋根の飯田駅があり、そこから城下町が碁盤の目のようにしてあり、さらに裾野には美しく生産地が広がっている。両手でぐっ掬ったような形をした伊奈谷は広くて明るく、普通の谷は日没が早い、明るい谷なのでほのぼのとして上品で、小京都と表現する人もいるが、京都ともまた違う。楽しむことを全部自分たちでやってみたい、半農半芸能人みたいな非常に面白い人たち、大人しくても個性がはっきりしていて、その個性のやりとりも上手。自分を下げることはあっても卑屈な人がいない。「こんな田舎までよく来たね」とは言っても、自分たちを田舎者だと思っていない。通っているうちに田舎だなんてとんでもない、と思えてくる、ゆっくりと成熟していく大木のような街。これは自転車にぴったりなまちだと惚れ込んだ。

新宿から4時間もバスに乗ればそこがもう飯田。駅降りたらもう商店街。丘の上から5分の大平通りという山道は、まるで庭にヒルクライムのためのジムがあるよう。こじんまりした中に、自転車遊びを大量に詰め込むことができる楽しさ、水は美味しい空気はきれいで、食べ物も本当に美味しい。しかし通うとなるとお金が要る。この飯田に溶け込むべく何か仕事をもらってみようと、農家が忙しい時期に住み込みでご飯を作ったり、獅子舞のMCをしたり、地元の有力企業である、高野豆腐で有名な旭松さんからパッケージデザインの依頼をいただいたり。キャッシュフローのない土地なので、現金をもらうことが難しく、最初のうちのギャランティは米塩酒で、家が神社のような状態に。それではお困りでしょうと、旭松の方が高野豆腐をくださり、おかげでできた。自転車乗りになってわかったこと。人間、金額で生きていけません。カロリーで生きています。

<飯田、大人の自転車>

よそから来た人を歓迎しようという、おもてなしの精神がものすごく強い。辻浦圭一選手が7連覇した時のシクロクロス全日本選手権では、人の背丈より高い草が一面に生えた河原一帯を、地元の人が刈ってくれてコース作りをしてくれた。誘致したTOJでは、学生たちはこの日はお休みになり、沿道で旗を振ってみんなを応援してくれる。申し込めば誰でも走れるパレードランでは、選手も私たちも、この旗の中を走って本コースまで行ける。残念ながらTOJ飯田ステージは今のところ週の中日になっていて、県外からの観客が多くないが、それでも年々そのパレードラン参加希望者が増えている。

坂道自転車通勤隊といって、普段仕事をしながら自転車トレーニングしている人たちが、イベント時にはスタッフとして頑張ってくれている。ボランティア精神も非常に強い。

<ツールに向かうということは>

ツールを目指すのに何が必要かということ、文化として根付く、子どもたちが憧れて大人になれる状況、未来を楽しみにできる自転車の姿があるのではないかな。

飯田でキャンプ場を開いている鈴木道郎さんという方が、子どもたちを集めて、マウンテンバイクを教えているところに、福島康司選手が訪ねてきて、この子たちにロードバイクを教えてみないか、ということになった。子どもはただ嬉しくて走る。速い背中を見て、嬉しそうにひたすら走る。プレッシャーが無いので、素直にどんどんいろんなものを吸収していく。フランスで新城君を見た時の感じ。乗りこなして、成長している。一端の選手を見ているよう。

最初は小学生対象に教えていただけだったが、中学に上がっても学校の部活に入らず戻ってくる。小学1年生から高校生までの子どもたちがチームジャージを着て、一緒に走っている。今ではTOJに行くと、プロ選手よりも子どもたちの方にカメラが向くほど、子どもたちは本当に格好いい。

こういうことが、各地域でいくつも起こってきていると思うが、そういう時に東京で一概に「これがルールだ」と言ってしまうと、真面目な地方はそれを取り入れてしまう。東京と田舎の交通事情はまったく違う。絶対的に人の数が少ないので、自転車は乗りやすく、自由に走れる環境がある。飯田市は子どもに自転車免許を出しているような真面目な市なので、このまますくすく伸びて行ってほしい。こういう子どもたちが増えていって、ツールに向かうのではないかなと思う。

シクロクロスのシリーズ戦を年間に何戦もやって、表彰して、賞品をあげる。それができるのも地元企業の社長の一存が誰かに伝えることができるという規模があるから。フランスと同じで、励みになることをきちんと繰り返す。これを維持するのに、今一番の問題になっていることが機材の悩み。中古の部品をかき集めて、選手のお下がりのフレームに組み付けて、レースの時に乗せている。機材がプロになっただけでものすごくタイムが違う。もうその瞬間から違う。頑張る気持ちをそのまま伸ばしてやること、プロにならないと手が届かないではなく、そういう支援があると、チームで何かができるかということに対して面白いかもしれない。

大人のレースは、私がついていたアンカーの時が一番面白かった。一塊の選手が3年間くらいいて、選手の顔を覚えることができたが、今は毎年変わるので追っていけない。フランスでも、何年間か選手を固定することがあるように、基本的にはエンターテインメントなら、応援していきやすい作り方が必要で、わたしたちが見守ることで、人の目があるよ、頑張れよ、と言うことはできる。

子供の成長は早い。わたしがお棺に行くか彼らがツールに行くかの勝負だと思う。ベテランの皆さん、近所のお子さんを集めてやり始めてもいいかもしれない。そういうことがたくさんたくさん起こってくれば。まずひとつ萌芽がこの飯田にある、これもわたしを飯田にくぎ付けにした理由のひとつ。

<文化が変わるということ>

たとえば飯田のOLさんは、飯田市に自転車レースが来ると言う事がきっかけで自分も乗り始め、それが携わりたい気持ちになって、3級審判を取った。長野県車連の方々には優秀な割に意外と級を取っている人が少なかったが、その彼女が2級を取るという時に、じゃあ一緒に取りましょうということになった。ちょっとしたきっかけにもなった審判の彼女、こんなふうに地元で頑張っている人をみんなで応援してあげること、会ったことのない誰かではなく、成長を見守れること、これが文化が変わるっていうことではないかと。これはメディアも一緒に、飯田の記者さんでも結構あつたかい写真を撮る人がたくさんいる。(TOJもそういう記者さんたちがどこなりと陣取って、みんなの写真を撮っていた。)

<つるちばにいらっしゃい！>

自転車に乗る時に、手に括るようなもので何かないかとなった時に、飯田市は水引生産量が全国の八割ということで、水引で編んだミサンガを企画した。ちょうど泰阜村というところに、千葉からお嫁に来た人が発見した“足神様”という祠があって、じゃあそれのお守り、ということで、自転車のイベントか何かに繋げてみよう企画し、このミサンガを、参加賞として受け入れてくれたのが2009年のツール・ド・千葉だった。

文化が変わっていく地域が飯田だとすると、千葉は自転車の国が興ってくる感じ。千葉の自転車イベントは富津ふれあいサイクリングや波乗りトライアルなどあるが、このツール・ド・千葉は、延べ3千人が千葉中をぐるっと3日間かけて300キロほどを走り、地元の人たちの目にもたくさん触れる。第1回はたった350人だったが、そこから着実に伸びた理由は、指導員の皆さんにある。ほぼ3人の参加者に1人つくほどたくさんの方の協力で、誰ひとり寂しい思いをすることなく、走り切れるロングライド、それがこのツール・ド・千葉。初心者でも、お子さんでも、安心して走れる。そして多大なる協力をいただいているのが、千葉県サイクリング協会。ツール・ド・千葉で触れ合っていくうちに、県外の方も加入することが多く、全国第2位の人数に膨れ上がった、それぐらい人気のイベント。

自転車は昔からずっとあって、いつ流行るか、いつブームが来るかと皆たぶん思っていた。こんな楽しい乗り物はない。ファンはじわじわ増えていっても減ることはない。ブー

ムになりかけなりかけでここまで来たが、物事の立ち上がりの突端になることに一番必要なのは、それを知らない人が入ってくるタイミング。知らない人が入ってきて、これは面白いと思った時の情熱の熱量、これが一番大事。飯田市も、「自転車が面白い」と、自転車を入れてきた職員さんは自転車のことをまったく知らなかった。ツール・ド・千葉を運営している千葉日報さんも、自転車をまったく知らなかったので、最初の年はスポーツドリンクもなく結構苦労した。指導員や参加者から要望が足されていき、お互いがお互いに必要とされてここまで大きくなった。参加者にはリピーターが多く、既に同窓会みたいな感じに。ここに来て3日間ブートキャンプに浸って、上手になってまた上手になってまた上手になって帰ってくる、どんどんレベルアップして行って、事故も減る。MCをしていると、「朝生さん鎖骨折っちゃった鎖骨～」みたいな人がたまに現れたりもするが、そのぐらいの楽しさ、ゆるさを完璧な自己責任という中で楽しんでいただける、千葉というお土地柄なのか、関わっているスタッフの人柄がみんなに伝播しているのか。飯田に次いでわたしの尊敬するもの。

東京でいい大人としてちゃんと乗れる人になりたければ、是非ツルチバに来ていただきたい。最初一人で参加していたが、チームになってジャージを着て戻ってくる人、毎回真っ赤なコカコーラのロゴの入った自転車に真っ赤な服で参加してくる人。千葉の専門学校の子供たちが、バイトしたお金で参加してくる通称チャリ部は、最初は10人に満たないぐらいのぼーっとした子どもたちがママチャリで参加してきて、積んでいたペットボトルを川に落としたりコースミスしたり、いろいろはらはらさせてくれながらも、ママチャリで完走して、その子たちが楽しんだかどうか正直すごく不安だったが、翌年から人が増えてきて、ぼーっとしていたけど、楽しかったんだな、と安堵をくれた。ここの校長先生は最初体重120~30キロぐらいの巨漢だったが、参加をされて、ものすごい乗られる方になり、おからだが当時の三分の一ぐらいに精悍な感じになって、自転車でダイエットという話題があったら、是非先生に話していただきたい。

秋の連休、ツールの選手よろしく、起きてから寝るまで自転車のことだけ考えていていいという3日間……実は千葉県も被災地の一つであり、道が災害指定道路になってしまうと、こういったイベントに使用できる日数が制限されるため、3日間が2日間になってしまう可能性もあり、今回が3日間走れる最後かもしれない。多くの方に、それぞれ文字通り三日三晩自転車のことだけ考えていていいこの機会を逃さず、都内からも非常に近いし、今回九十九里スタートなので交通の便もいいし、上限は70歳くらいまでのため、皆さんまだまだ大丈夫だと思うので、是非参加をしていただきたい。ゆるきゃらのチーバくんやうなりくんも来てくれた。来られていないのは森田健作知事ぐらい。次回は来ていただきたいものだ。

2012年の日程は10月6、7、8の連休。自転車のレースというのは、千葉日報としてもゴルフなどに比べるとまったくお金にならないが、地元の意義としては大きい、ということで頑張っている。発表が遅い、などツイッターなどで見ることもあるが、必死にやっているの信じて待っていただければと思う。

くげたとうどんとじゃーじ、やったことをないことをやろう。…と、思ってます。>

近況としては、下駄とうどんと、自分がデザインした足軽ジャージをリュックに背負って、自転車に乗って販売をしています。下駄は鼠の子と書いてネズコという、木曾の五木のうちのひとつでできていて、鼠のような毛流れがあり、足を入れるとすっと馴染む。今日持ってきているので、是非一度履いてみてください。SPDシューズの中で縮まった足を伸ばす、履いている間中フローリングという、なかなか素敵な履物です。申し込んでいただくと、顔を写真に撮らせていただいて、似合う鼻緒を挿げた状態で、お届けします。

お配りしたホワイトニング化粧品のサンプルですが、私がスポンサーされているわけではなく、ここの会社の会長さんが飲み友達、という関係でいただきました。そういう感じで繋がれて、初めて何かファンクションが起こる。こういう面白さをタレントという職業は持っている、ご理解いただければいいかなと思っております。そんなわけでわたくしのPRで終わってしまいましたが、このあたりで。

《セミナーの様子》



「この事業は、競輪の補助を受けて実施しました。」

「RING!RING!プロジェクト」 リンク先：<<http://ringring-keirin.jp>>

